

01・波音を聞きながら、膝枕でリラックス

とある夏の日。十一時ごろ。

日本国内の、とある暖かい地域にある、小さな島。

……の、静かな浜辺。

主人公は今、ここに横たわり、波音を聞いている。

この島に住む学生『補綴 ありさ（ほてい ありさ）』に膝枕されながら、静かな時間を過ごしている。

天候は晴れ。気温は過ごしやすい暑さ。

頭上にはパラソルが立ててあり、直射日光を浴びる事もなく、快適だ。
穏やかで優しい、包み込むような、最高の環境である。

だが、主人公には、そんな素晴らしい場所にいる自覚がない。
たった今の今まで、眠っていたからである。

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0—10秒ほど流してから『ありさ』のセリフ】

〈主人公〉

「……………」

主人公、波音が少しだけ大きくなったのをきっかけに、ピクリと小さく動き、それからようやく目を開ける。

すると……そんな主人公を優しく見下ろし、穏やかに話しかける声があった。

「【穏やかに落ち着いて、嬉しそうに。

ありさとしては、かなり喜んでいる。

だが、性格上、大きな声を上げたり、あからさまに声が弾んだりはない。

あくまで落ち着いている】

おっつ。

【穏やかに、嬉しそうに。

まるで毎日会っている友人のように、初対面の主人公に挨拶をする。

また、よく寝ていた事を伝える」

おはよう。

一杯寝たねえ♪ もお朝だよお」

〈主人公〉

「……？ ……？ ……？ ……？」

主人公、

『……目を覚ますと、見知らぬ女の子が膝枕をしてくれている』

などという、まるでフィクションの世界のような光景に目をぱちくりさせ、硬直する。

「【少し自信がなさそうに。

首を傾げて話しているイメージで。

今、ざっくりと『朝』と言ったが、よく考えると、すでに『昼』に近い時間帯なので。

『というか』が『つか』になる」

っーか、んゝ？
昼う？」

だが、膝を貸してくれている十代後半ほどの女性は、もっと別の事が気になっているようだ。

ありさ、主人公に正確な時間を教えてあげようと、鞆からスマホを取り出す。

SE2 ありさがスマホを取り出す音

【最初から最後まで流す】

「【スマホで時間を確認して。

『もうこんな時間か』と、少し感心している。

来た時は『朝』だった。しかし時刻はすでにもう『ほとんど昼』なので。

その位長い時間、ありさは主人公を膝枕していたので。

だが、この件については特に気にしていない。ありさはのんびりした性格なので」
おゝ。

【にこやかに。

正確な時間を伝える」

十一時だ。十一時三分です」

〈主人公〉

「……十一、時……？」

主人公、ひとまず今の時刻を覚えてもらえたものの、依然として、己の置かれた状況がわからない。

ただただ、

〈主人公〉

「じゅうさんぶん……」

と、ありさの言葉を繰り返すばかりだ。

「【少しだけ驚いて。

どうやら、主人公がここに来た経緯を覚えていなさそうなので。ありさとしては、なかなか驚いている。

しかし、ほとんどそうとは聞こえない声で」
ええ？

何（なん）でここ居るか、覚えてない感じ？

【少しでも考えこんで。

できるだけ、答えやすい質問を考えている】
んゝ……。

【穏やかに優しく。

あまり主人公を不安にさせたくないのです。

『どの位』が『どんぐらい』になる】

じゃあ、どんぐらいまでなら思い出せる？」

〈主人公〉

「……えーっと。

昨日、ちょっとした旅行のつもりで、一人でこちらの島まで来て。

夜、海が素敵だなあと思って、このあたりを歩いてみた所までくらいまでは……」

主人公、ひとまず覚えている範囲で答える。

するとなんだか、おぼろげにだが、少しずつ記憶が戻ってくるような気がしないでもな

い。

そう、主人公はこの島の住人ではない。

普段は、この島から飛行機で何時間も行ったところに住んでいる。

だが約ひと月ほど前、急にすべてが嫌になって退職を決意。

一昨日、ついにすべての仕事を終え、退職した瞬間、そのまま即、旅に出る支度を始めた。

そして昨日、この島へやってきたという訳だ。

……だが、肝心の、島に降り立ってからの記憶があいまいだ。

ありさはそんな主人公に、ひとまず自分の知っている事を伝えていく。

「【穏やかに。まるで動じていない様子で。

しかし内心は『その辺から記憶ないのか』と、結構驚いている」
あ。そこから。

【穏やかにゆっくりと。

自分が発見した時の主人公の様子を、順に説明していく。

以後ありさは主人公を『お姉さん』と呼ぶ」
んくとねえ。

お姉さんは。

【すぐそばの浜辺を指さして。

『ベターっ』とは『うつ伏せで、大の字になって』という意味】
今朝、その砂んここで、ベターってなって寝てたの」

〈主人公〉

「……えええっ？」

「【穏やかに頷いて】

うん。

【穏やかにその時の状況を説明する。

膝枕したままの姿勢で両手を大きく広げ、主人公が寝ていた時のポーズを再現しながら話している】

あたしがきた時にはもう。グダーって」

〈主人公〉

「……………」

主人公、絶句する。

昨日の自分は、一体何を思っでそんな場所、そんな姿勢で寝ていたのか。それを、まるで思い出せないからだ。

そして、さーっと青ざめる。

というかまず……あまりにも……危険すぎる……。

私はなんて事をしてしまったんだ……。

と。

「『穏やかに説明を続ける。』

まるでそうするのが当然であつたかのように話す。

『そのまま直射日光が当たる場所に放置していたら、肌が焼けるどころか、焦げるほど熱くなってしまうだろう』という意味の事を話している」

でもさあ。

そのままじゃ、日焼けっつーか、焦げるじゃん？

だから連れてきたの」

〈主人公〉

「あなたが？」

「【穏やかに、にっこりと。

まるでそうするのが当然であつたかのように話す】
うん。あたしが。

【穏やかにその時の状況を説明する。

膝枕したまま、今度は両手を、綱引きしているかのように動かす。
主人公をここまで連れてきた時の様子をジェスチャーしている】
引っ張って。このパラソルまで連れてきました♪」

〈主人公〉

「……！」

主人公、今度は驚きで息をのむ。

そうか。自分がここに居られるのは、彼女のお陰だったのか。

考えてみれば当然だが、頭がぼんやりしすぎて、主人公はその結論にすら至らなかった。
これはまず、お詫びとお礼をしなければならない。

〈主人公〉

「それはそれは……！」

ごめんなさい。大変ご迷惑をおかけしました……！」

なので主人公は、膝枕されたまま、頭だけ動かして、何度もペコペコとお辞儀をする。そんな主人公を、ありさはニコニコと見つめている。

「【穏やかに、にっこりと。

まるで気にしていない様子で】

え？

いーよいーよお。

人間、そんな時もあるっしょ」

〈主人公〉

「そ、そうですかね……？」

んん？

人間そんな時もある……。

ある……。

ある、のか……？

主人公、ありがあまりにも気にしていないので、かえって混乱してくる。しかし、目の前の彼女は、完全に主人公の行動を受け入れているようだ。冷静に考えたら、人間そんな時があっては困る。困るのだが……それでも、彼女は許してくれるらしい。

「穏やかに、少し心配そうに。

まるで気にしていない様子で。

主人公が自分の発言にすっかり混乱している事も、全く気にしていない」
お姉さん、よっぽど疲れてたんだねえ」

SE 3 ありが主人公の頭を撫でる音

「最初から最後まで流す」

「1 回目はSEのみで流し、残りは次の『ありが』のセリフと同時に流す」

ありさ、なで、なでと、優しく主人公の頭を撫でる。

「【穏やかに優しく。】

慣れた様子で、まるで小さな子にするかのように主人公の頭を撫で、あやしている」
よしよし。

いい子いい子。

せっかくだからあ。

ここでゆっくり休んでけ？」

〈主人公〉

「……………」

主人公、どう見ても年下と思われる女性にたっぷり優しくされ、思わずコクリと頷く。
彼女はその容姿こそとても若いものの、随分と落ち着いているというか、年齢を超越した、泰然としたオーラがある。

だから主人公は、それを間近で浴びるうちに……………すっかり素直になってしまったのだ。

〈主人公〉

「……ありがとう……。」

ところで、あなたは……？」

こうして落ち着きを取り戻した主人公は、まず、今一番気になる事を聞く事にした。今頭を撫でてくれている、彼女についてだ。

「【少しキョトンとして。

一瞬、何を聞かれているのか、よくわからなかったのだ。

しかしすぐに『あなたはどちら様ですか？』と質問をされている事を理解する」
ん？

【穏やかに落ち着いて。

まるで動じていない様子で、よどみなく自己紹介する。

しかし実際は『あっ。そう言えば言っていないかった』と、少し驚いている」
あ。あたしく、ありさ。

補綴（ほてい）　ありさっていいまゝす。

この辺住んでるJK（ジェーケー）でゝす。

【『よろしく』が『よろ』に省略される】

よろゝ♪」

〈主人公〉

「よろしく……」

主人公『よろしく』と言われたようなので、同じように『よろしく』と挨拶をする。すでに口調がうつり始めている。

「【穏やかに、ふと思い出して。

『主人公は今、自分が持ってきていた荷物が心配なのではないか』と気づいたので。落ち着いた様子で『荷物に関しては心配しないで』と伝えていく」

あゝ♪ そうだ。

荷物。ちゃんと拾ってあるよ」

〈主人公〉

「あっ！ そうだ！ 荷物！」

主人公、言われてから初めて己の荷物の存在を思い出し、思わず飛び起きそうになる。だが、ありさはそれすらも全く気にせず、主人公に大きなカバンを差し出した。

「【にっこにこと、少し得意げに。

今の今まですっかり忘れていたくせに、思い出した途端、荷物の件についてあたふたしだす主人公が可愛いので」

はいっ。これ♪」

SE 4 ありさが主人公の荷物を見せる音

【最初から最後まで流す】

SE 5 ありさが主人公の荷物をぼん、ぼんと叩く音

【最初から最後まで流す】

ありさ、そう言いながら、主人公の荷物をぼん、ぼん、と叩く。

ご丁寧に、主人公が寝たままでも存在を確認できるようにしてくれる。

「【少しだけ心配そうに。

『落ちていた分は全部拾ったが、もしかすると紛失や盗難に遭ってはいないか』と、不安になってきたので」

全部集めたと思うけど、大丈夫？
なくなってるもんじゃない？」

〈主人公〉

「……………」

——あつ。そうだわ。

……確かにその可能性はある。

何せ、持ち主がこのありさまなんですもの。

一晩じゅう放置されていた荷物が、えらい目に遭っていてもおかしくはないというか……。

主人公、ありさの言葉を受け、青ざめながら慌てて荷物の確認を始める。

ありさはそれを、神妙な顔つきで見ている。

そのまま、数十秒が経過した頃……。

SE 6 主人公が起き上がる音

【最初から最後まで流す】

SE7 主人公が自分の荷物を確認する音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……大丈夫！ みんなあります」

無事、問題ない事がわかった。

〈主人公〉

「現金とか、カード類とかも大丈夫……」。

……はー！ 本当にありがとう！ 助かりました」

主人公はホッとして大きく息をつき、ありさも安堵した表情を浮かべている。
よかった。これ以上ありさに迷惑をかける事はなさそうだ。

「【穏やかに落ち着いて。

だが、内心はかなりホッとしている。

この島はとても治安がよく、ありさもそれが自慢である。

だから、怪しげな人間や、悪い事をする人間は、基本的にいないと思っている。

しかし、万が一『金銭やカード類だけが盗まれている』などという事があったら、ありさとしても、非常にショックなので」

ほんとう？

良かった。

【『よかった』が『良かった』になる】

平和な島で良かったねえ♡

【ふと思い出して。

『違うとは思うが、念のため確認する』という感じで。

実は主人公の近くには、鞆の他にも、とあるものが落ちていた。

『しかしこちらは、主人公のものではないだろう』と、ありさは思っているのだ。

『これは』が『こっれは』になる】

あとさあ、これも一応拾ったんだけど。

こっれは違う……よね？」

〈主人公〉

「あ、それも私のです」

主人公、即答する。

おかしい話ではあるが『それ』に関してはよく覚えていた。

『それ』は間違いなく、主人公の荷物である。

「『少しだけ驚いて。』

それは、ゴミの入った透明な袋だったのだ。

なので『もしかして、この浜辺でゴミ拾いをしていたのか?』と質問する」

え? これもお姉さんの?

ゴミ拾いしてたの?」

〈主人公〉

「そうです。……だんだん思い出してきたよ。

わたし、昨日の夜の20時ごろ、近くの店でご飯を食べて、何となくこの浜辺に来てね。

『綺麗な所だなあ』って楽しく歩いてたんだけど。

そのうち、ゴミがいくつか落ちてる事に気づいちゃって。

段々気になってきて、そしたらちようどレジ袋を持ってる事を思い出してね。

だから拾って、袋に入れてるうちに……」

『あそこのちよつと歩きにくくなつてるところで躓いて、転んで。

浜辺に倒れたまま、氣を失ったんだと思う……』

主人公、そう続けようとするが、ありさを心配させそうなのでやめておく。
なので慌てて、

〈主人公〉

「んっ。んー」

と咳払いし、

〈主人公〉

「ごみ捨てが楽しすぎて。

おおむね拾い終わったあたりで満足して寝ちゃったんだと思う！」

と、誤魔化した。

「とても嬉しそうに笑いながら。

少しテンションが上がる。

主人公が、海を大切にしてくれる人だという事がわかったので、好感を抱く」

それは覚えてんの？

ははっ♡

綺麗にしてくれてありがとう♡」

若干苦しい説明のような気はするが、ありさは疑っていないようだ。

それどころか、ごみ拾いをした主人公の事を、どうやらいたく気に入った様子である。

ありさはとても嬉しそうな表情になると、主人公の姿勢をそーっと、だが、当然のように横にさせて膝枕の状態に戻す。

それから、さつきよりもほんの少しテンションが上がった様子で続ける。

「とても嬉しそうに笑いながら。

『後で、ゴミ捨て場を教える』という意味で言っている」

じゃあ後で、捨てるって教えんね♡

「とても嬉しそうに。

少しテンションが上がる。

主人公の事は、正直、出会った瞬間『見た目からしてとても好みだ』と思っていた。その上たった今『内面もとても好みのようだ』と感じたので。

ありさは、この島を大切にしてくれる人が大好きである」

お姉さんめっちゃいい人じゃくん♪」

〈主人公〉

「えへへ。そんな大した事はしてませんよお……」

そんなありさの笑顔を見て、主人公もつい笑顔になる。

だが、聞きたい事はまだある。

この現状についてだ。

〈主人公〉

「ところで、あの。補綴さん。あともう一つ聞いていいかな？」

「【穏やかに、少しきよんととして。

主人公が何を聞こうとしているのかわからないので」
ん？」

〈主人公〉

「なぜ私は、その……。そのお……」

しかし、主人公がはっきりと尋ねられずもごもごしている。
ありさがあっさりと、はっきりとこう言った。

「『穏やかに、慣れた様子で。』

まるで小さな子にするかのように、主人公を膝枕したまま答える」
あゝ。

これは。膝枕だよ。

「膝枕をしてあげた経緯を、極端に省略して話す。

『主人公を発見した時、主人公は気を失っていた。』

なので、まずは様子を見ようと、このパラソルの下に連れてきた。
だが、しばらく観察するうち、特に問題なさそうな事がわかった。

なので、無理に起こすのもかわいそうになり、起きるまでここで寝かせておいてあげる
事にした。

それなら枕になるものがあるといいと思ったが、なかった。

なので、自分の膝を枕にした』
という意味で言っている」

他に枕になるもんなかったからさう。

あたしの膝でごめんねえう」

〈主人公〉

「えっ！ とんでもない……！ 今すぐ起きる、起きるね！」

主人公、慌てて起き上がろうとするが、ありさに優しく止められる。

「穏やかに、慣れた様子で。」

まるで小さな子にするかのように主人公を膝枕したまま答える」

えう？

いーよいーよ。

このまま寝てきなってう。

掃除してくれたお礼う。

あたしも暇だからさあ。

ここでのんびりしてこう？」

〈主人公〉

「……いいの？」

「【穏やかに上機嫌で】

うん♪」

〈主人公〉

「でも……」

本当に、本当にそうなのだろうか。

主人公、ありさがあまりにも親切なので、かえって申し訳なくなり、逡巡する。
だが、やはりありさは気にしていないらしい。

ニコニコとこちらを見下ろしながら、主人公を受け入れてくれる。

「【穏やかに上機嫌で。

『主人公は膝枕をされていていい』と念を押す」

いいの♪

人生、そんな日もあるさ〜♥

【穏やかに上機嫌で鼻歌を歌う。

※『鼻歌風』の、次のセリフに適当に節をつけたものでOKです※】
ふ〜ん。ふんふ〜ん♪」

そのまま10秒ほど、穏やかな沈黙が流れる。

「【穏やかにうつとりと。

その位波音が心地よく、主人公は好ましいので】
は〜……。』

波の音っていいよねえ。

『癒される〜♥』ってなんない？」

〈主人公〉

「なる〜……」

こうして主人公は、膝枕されたまま、ありさと波音を聞く事になった。
それにしても主人公、すでに、すっかりありさの口調がうつっている。

「【穏やかに上機嫌で。

『自分は、この浜辺に来ればいつでも本物の波音が聞ける。

しかし、音楽サブスクリプションサービスなどを利用する際も、つい『波音』などで検索して、録音された音源を探してしまう』という意味で言っている」

なるよね〜♪

あたしもさ〜。すごい好きで〜。

ここで本物聞けんのにい。

いつも『海の音〜』とか『癒し〜』とかで検索して。

サブスクとかでも聴いちゃうの〜」

〈主人公〉

「わかる〜……！」

だからわたしも今回、旅行先に海を選んだんだ〜」

二人、こうしてのんびりと『海トーク』を始める。

「【穏やかに上機嫌で。

『どうやら自分と主人公は、気が合うらしい』とわかったのだ。

また、その位主人公は海を気に入っているとわかったのだ」

わかる？

あ、だから海いたんだ。

あたしも海、ちよー好き。

【『もはや自分は魚並みに、海と密着した生活をしている』という意味で言っている】
もはや魚のつもりで生きてる♪

【穏やかに上機嫌で。

特に嬉しそうに】

お姉さんとあたし。氣い合うね♥」

〈主人公〉

「えへへ。合うね〜……♪」

そしてこのまま、たわいない会話と共に、時間が過ぎていくかのように思えた。
だが……。

そのまま10秒ほど、穏やかな沈黙が流れる。

「【穏やかに、何でもない事のように切り出す。

『主人公は、何か嫌な事があってこの島に来たのだろう』と、何となく察している」
てーか、お姉さんってさあ。

もしかして、色々めんどくさくなっちゃった系？」

ありさのこんな質問が、場の空気を変える。

だが、ありさにはその答えを知る権利があるだろう。

主人公はへらりと笑うと、正直に頷いた。

〈主人公〉

「あは。わかるゝ……？」

「【穏やかに、何でもない事のように続ける】
わかるよお。」

でなかったら平日の朝に、海で寝てないっしょ」

〈主人公〉

「実はさあ。」

私、都会で働いてたんだけど、仕事で色々いやになっちゃってさあ〜」

【穏やかに、優しく相槌を打って、主人公の話を聞く】
あ〜。

そうなんだあ」

〈主人公〉

「それで、全部やめて、急に旅行したいなって思ってた。

この島に来たんだけ。

それで、この島で過ごしてるうちに、この浜辺にたどり着いたのだけ。」

主人公としては、ただ、自分を解放してくれたありさに、ありのままを打ち明けるだけのつもりだった。

【主人公を気遣うように優しく、相槌を打つ】

……そっか。

なるほどねえ……」

〈主人公〉

「ダメな大人だよね。」

『もうちょっと頑張れ』って感じだよね。」

だが、話すうちに、どうしても気分は沈んでくる。

特にこれと言った事もできないまま会社を辞め、何物でもなくなってしまった自分。ようやく自由を手に入れたかと思いきや、早速羽目を外しすぎて、人に迷惑をかけている自分。

そんな己を省みていたら、どんどん情けなくなってきたしまったのだ。

「【穏やかに、優しく否定する。】

『いいや』が『いんや』になる」

いんや。

「【穏やかに、優しく主人公を肯定する】

それでいいんだよ」

だが、そんな主人公にも、ありさは優しい。

穏やかに肯定してくれる声を聴いていたら、主人公は泣きそうになってきた。

【少し明るく。

辛い経験を経てこの島にやってきた主人公を、自分なりに歓迎したいので」
難しく考えんで、今日はのんびりしよ♪

【ゆっくりと優しく。

主人公をねぎらう」

お姉さんは今日まで、浜で寝ちやう位疲れて悩んで、頑張った。
だから、休憩していいの。

【少し明るく。

主人公には、気楽に過ごしてほしいので」
休め休め♡」

〈主人公〉

「そう、かなあ……」

「【穏やかに上機嫌で。

『それが最良である』という感じで」

そう♪」

〈主人公〉

「そっかあ……」

主人公、ありさの優しい言葉がすっかり心にしみてしまい、そのまま何だか納得しかける。

こんな自分でも、ここに居てもいいのかもしれない。

少し位なら、休んでもいいのかもしれない。

そんな気持ちになってくる。

しかし、次の瞬間……ありさは驚くべき発言をした。

「【穏やかに上機嫌で。

さらっと話題を変え、さらっと主人公への好意を伝える】
てーかさあ。

あたし、お姉さんの事好き♡」

〈主人公〉

「！」

だから主人公は思わず息をのみ、ありさを見上げる。

すると彼女は、相変わらず優しく主人公を見つめていて……それに心打たれた主人公は、次の言葉に、素直にうなずいていた。

「【穏やかに上機嫌で。

さらっと『島にいる間、自分と一緒に過ごそう』と誘う」
だから。」

こっち居る間、一緒に遊ぶ？」

「【嬉しそうに念を押す】
ねっ？」

ここでフェードアウトして終了。